

研究論文

三重県における社会福祉事業の歴史（4） —災害時における大正期高田派の仏教福祉実践—

千 草 篤 磨

はじめに—本山報告（大正15年6月）所収「北海道における惨事」—

「本山報告」は明治34（1901）年2月に創刊されて以来、昭和19（1944）年まで毎月発行されてきた真宗高田派の月報である。終戦前後は不定期刊行となり、「本山通報」また「高田派宗報」、「真宗高田派宗報」と改題されてきた。現在は「宗報」として年6回発行されている。しかし、戦前の「本山報告」は、発行元である高田本山には保管されておらず、津市一身田町の玉保院などに僅かに保管されているのみである。ここには、大正期から終戦までの高田派の貴重な記録が収録されているが、一般の目に触れることはない。筆者はこれまで、大正期及び昭和初期から終戦までの高田派の社会事業について、玉保院蔵の「本山報告」を中心に紹介、考察してきた（千草、2017、2018）。

ここに紹介するのは、大正15（1926）年6月号の記事である。同年5月24日に起こった北海道の十勝岳の噴火による大惨事に際し、高田本山札幌別院（現：北海道別院）がいち早く執った援助行動の詳細である。当時の仏教者としての援助活動内容を振り返ることで、今日の災害ボランティアや地域福祉実践を考える一助としたい。

さらに、現存する戦前の「本山報告」は一般には閲覧の機会がないので、本稿の巻末に「北海道における惨事」の全文を、旧漢字、旧仮名遣いそのまま参考資料として掲載した。なお、以下の本文中における引用は新漢字、新仮名遣いを使用した。

1. 十勝岳の噴火について

十勝岳は北海道の中央部の美瑛町、上富良野町、新得町にまたがる標高2,077 mの活火山で、過去に何度も噴火を繰り返してきている。特に大正15年の噴火は多くの犠牲者を出し、大災害となった。内閣府の中央防災会議による報告書（2007）では次のように紹介されている。すなわち、「活火山十勝岳は、1923（大正12）年ごろから噴気活動が次第に激しくなり、1926（大正15）年5月24日に2回の噴火が起こった。2回目の噴火で、中央火口丘が崩壊して高温の岩屑なだれが発生し、急速に残雪を溶かして泥流を発生した。泥流は、美瑛川と富良野川を流下して25分余りで山麓の富良野原野の開拓地に到達し、死者・行方不明者が144人、損壊建物が372棟に達し、山林や耕地にも大きな災害をもたらした。噴火そのものの規模はさほど大きくはないものの、寒冷地で積雪期に起こる噴火災害の典型的な事例であり、海外で出版された専門書にも紹介されている」と専門的に述べている。

また、最近の新聞記事（2018）では、「十勝岳の大正噴火」として「大雪山系・十勝岳

(2,077 m) の中央火口丘で起きた大爆発。残雪を溶かし、岩石や土砂、巨木を巻き込んだ泥流が山津波となって上富良野町、美瑛町に押し寄せた。『大正泥流』とも呼ばれる。三浦綾子(1922～99年)は迫真の描写でこの史実を小説『泥流地帯』に描いた。『三重団体』をはじめとする人々の受難や救済が主題になっている」と一般向けに解説している。ここにも紹介されているように、三浦綾子が1977年と1979年に出した『泥流地帯』及び『続・泥流地帯』には、当時の様子を彷彿とさせるものがある。

2. 「北海道における惨事」報告の概要

大正15年6月号の報告では、「北海道における惨事」及び「硫黄山爆発し泥海を現出、吾派の専誠寺はじめ門徒多数罹災」という見出しで始まっている。まず、惨事の概要として、「十勝岳の一部にして、上川郡美瑛村を距たる約2里半の地点なる硫黄山は、5月24日午後4時頃突然大鳴動と共に、湖水を支えていた岩石決潰して流失し、山上よりは熱湯噴出して山麓に流下し、ために上富良野周囲約3里四方の間は全く泥海と化し惨憺たる光景は目もあてられなかった模様であるが、空知郡上富良野なる吾が派の専誠寺はじめ門徒多数罹災し、本山よりは夫々慰問救援の途を講じた」と、24日当日の概要をまとめている。

次に、「一、札幌別院より」と題して、高田本山札幌別院が執った翌日の対応を伝えている。すなわち、噴火の翌25日午前10時に北海タイムスの号外によりこの惨事の様子を知ると、直ぐに札幌別院から津市の高田本山に電報を打って事態を報告し、指示を仰いでいる。本山からは午後5時35分に「懇篤なる御慰問の電命」を受けた。具体的な電報の内容は記されていないが、午後6時には「御慰問電の趣並びに罹災者焦眉の急を救うべく義捐金を募集」する行動をとっている。そして、直ぐに「30余円」を集め、その日の午後10時には上富良野出身の職員1名を「同人家族安否を知るを兼ねて右の趣伝達の為不取敢急行せしめ村長吉田貞次郎(門徒)及び専誠寺へ派遣」している。これは、非常に早い対応であると考えられる。旭川方面への列車が何時に出るか、どこの駅まで列車が走っているのかも不明の中、とりあえず午後10時に札幌別院を出発し、札幌駅に向かわせたものと考えられる。また、札幌別院職員一同よりの「葉書1,000枚」を持たせている。

この職員は26日午前中には上富良野に到着したようで、葉書は「26日朝贈呈と同時に10分間にして罹災者の為に使用し尽くされ」た。したがって、「葉書1,000枚」を持参させたことは時宜を得た有効な判断であったと推測できる。

また、「刻々と発行せらるゝ号外により概要を知り、電信にて上申御援助を仰」いでいる。すなわち、当然テレビやラジオのない時代であるので、新聞の号外で情報を収集すると直ぐに札幌別院から津市の高田本山に報告をして、指示を仰いでいる。高田本山からは、「罹災者戸数を知らせよ」との指示があり、「80戸」と報告している。この時点で実際に80戸の高田派門徒が罹災したかどうかはわからないはずなので、差し当たりこの地域の門徒の戸数を報告したのではないかと考えられる。実際の調査後の罹災戸数及び死亡者人員は「戸

数（吾派門徒）76名」と記されている。

そして、実情視察と慰問のために「寺男2人を連れて出張」することとなる。その際に、「葉書2,000枚及び筆墨、副食物2樽、落雁3,000枚、蠟燭、線香等」を持参したと記している。災害時に親族へ安否を知らせる手段としての葉書は何よりも必要なものである。先の職員に1,000枚を持参させ、続いて2,000枚を新たに用意したものである。落雁も3,000枚とあるが、短期間に準備できたことを考えると、札幌別院関係者や札幌市内の高田派寺院、門徒の奮闘があったものと思われる。

3. 実状視察及び慰問1日目（大正15年5月29日）

次に、報告は「二、上富良野大惨害実情視察概要」を詳しく述べている。「5月29日救護隊、応援青年団、軍隊、見舞客等の為、殆どすし詰め如き列車に旭川よりは立ちづめにて午後2時前美瑛駅通過。上富良野駅の手前1マイル程の処より明かに大惨事の実況展開せらる」と、列車の様子を記すると共に「此辺より鉄道線路は1日2,000余人の工夫の手により昼夜兼行4日間位にて3尺以上の泥海の真直中を土俵により道を造り新らしく鉄路を敷きて完成せるものなれば汽車のガタガタと揺れる事限りなし」と説明しているが、災害後4日間で仮設の線路を敷設したのであり、5月29日は開通したばかりということになる。25日夜に単独で派遣した職員がどのような方法で被災地に入ったのかは不明であるが、美瑛駅で下車して上富良野までは徒歩で行ったものと考えられる。

また、29日の列車から見た様子を次のように記している。「朝来の大豪雨に窓外被害地泥土の上を濁流沼々として逆巻き、一望只濁れる大泥海、あたかも盥の中にマッチの軸木をバラ蒔きたるに似たると、流失倒壊せる家屋の残骸点々たると、豪雨の中泥海の中に腹部まで這入りて交通の為流木を利用して縦横に架設する假橋の工事のために従事する救援隊の人影と、何々青年団或は何々応援隊と記せる旗影とのみ」が認められたと、雨の中での災害復旧や救助に当たる人々の姿を書き留めている。

漸くたどり着いた上富良野駅は、「構内を出でて見れば駅前に救護所本部あり。上川支庁出張所、警察、軍隊、救援隊、役場出張所、道庁出張所、避難民受付及案内、通信機関出張所、三重県出張所、慰問品受付其他10枚程の貼紙を以て事務所の表示をなし、テント張りの休憩所、有志の茶接待所、炊出しの本部等、何百人の係員右往左往し其間に避難者を訪ぬる人、申込む人あり、これらの中に交りて各宗僧侶及新聞記者、青年団等東奔西走し、郵便配達は電信書面等を山の如くに負ひて一々避難者の所を探しつゝある様、実に戦場も斯くやと思はれ俄かに緊張味を感ず」ほどの有様であった。ここでは、三重県出張所が、川上支庁出張所や北海道庁出張所と並んで設置されていたことが記されており、三重団体の被災が大きかったことがうかがえる。なお、新聞記者、郵便配達、青年団と共に「各宗僧侶」が東奔西走していたという記事は僧侶ならではの捉え方であり、仏教福祉の視点からも重要な資料である。

さて、目的の一つである高田派専誠寺訪問は泥流で道がなくなっており、避難者受付に行く人が多くどうしようもなかったところ、以前札幌別院に参詣に来た上富良野駅前料理店主を思い出して尋ねると、幸運にも寺族の居場所が判明した。前日の28日に御本尊と共に避難してきたとのことであった。尋ね当てると、「直に準備し来れる蠟燭、線香、落雁を供え、且つ懷中に持参し来れる『十勝ヶ嶽硫黄山爆發罹災死亡者靈位』と記せる位牌を尊前へ安置し、従ひ来れる門徒及び下男2人と共に小経正信偈一首讚を勤行」している。午後5時に専誠寺住職と別院職員と再会し、「別院門徒有志より贈る処の義捐金を以て購入せる葉書2,000枚及び落雁、筆墨、副食物等を呈し同寺門徒総代村長吉田貞次郎と相談の結果、可然処分せられ度く伝えて、直に市街地在住の門徒を慰問のため訪問する事に決し、洋装の上に輪袈裟を着用し住職の案内にて下男2人を連れて7時までに20戸ばかりを慰問」と記している。ここに名前が出てくる専誠寺総代の吉田貞次郎村長は三浦綾子の『泥流地帯』でも実名で登場する村長で、この災害時に不眠不休の活動を行った人物である。この村長に葉書2,000枚や副食物等を適切に役立ててもらおうと贈呈したのである。直接村長に託したことから、高田派門徒のみに配布するのではなく、困難を強いられている被災者に広く行き渡るよう対応している。すなわち、高田本山や高田派門徒からの義捐金や寄付物品であるが、宗派に捕らわれず支援していることがうかがえる。また、5時から7時の2時間の間に専誠寺住職の案内で20戸の門徒慰問を行ったとしている。

4. 実状視察及び慰問2日目(大正15年5月30日)

翌5月30日は晴天となり、朝5時から専誠寺の視察に赴いている。「市街地はづれより約18丁を隔てたる同寺の前まで、必死の努力によりて架けられたる仮橋に、廻り7、8尺もある無数の流木の横たわりたるを台として、それに旭川、池田方面より急送したる板を架けたるものにして漸く人一人通行し得る程度なり。而かも1尺乃至5寸下は濁流滔々として奔流し、落つれば泥土の深さ平均3、4尺と称する。故に到底普通の者は助かるを得不得。目はまい、見渡す限り一大泥海。18丁の間は真に命がけなり。一步一步念佛と共に渡り、1時間もかゝりて専誠寺の前に達す」と記している。18丁は約2kmの距離である。見渡す限りの泥海の中に架けられた、人間が一人漸く通ることのできる板の上を命がけで渡り、2kmの距離を1時間かけて辿り着いたものである。正に「一步一步念佛と共に渡」ったものと思われる。

専誠寺の被害状況については、周囲の家屋が泥流に流され、また泥に埋まって屋根のみ見えるのみであるのに、「然るに本堂庫裡平然と残れり。実に奇蹟的なり」と述べている。「仔細に検分すれば此寺院の残れるは、奔流の中心点に当たりたる為、上より流れ来たる流木が先づ寺の廓外の立木にかゝり、その流木の積まれたるのみにても約3丈の高さに達す。それに流失の家屋もかゝり自然と防波壁を作り、これによりて奔流は両方に分流せられて勢力を失ひたる。故に寺院のみ流失を免れたるものなり」と分析している。しかし、本堂

内や庫裏は惨憺たる状況であり、家財道具を運び出すには泥土が乾いた後でないとは出来ないと報告している。

また、寺族から聞き取った噴火当時の命がけの体験を書き留めている。「住職は市街に行きて不在。午後4時半頃大鳴動ありし後、瞬時にして2、3丈の泥流押し寄せ来り。本堂内に大流木飛び込み来たり。如何ともする不能。庫裡は見る見るうちに4尺以上の泥床上に上り、段々追い詰められて本堂裏の最後の一室に逃ぐ。子供3名を坊守は背に両側に抱き死を決してありしに、泥は3尺に達する時よいよ最後なりと観念せる折、俄かに座敷の畳そのまゝに浮き上がりて埋まるを免る。夜の10時過に段々下りて落付きたりて、漸く12時過に一命を助かりたるを知りしと、これ床下に入りたる泥なるが故に、床板共に押し上げたる為なり。住職は万難を排して午前2時頃各地を迂廻して、胸までの泥中を押し切り、漸く帰寺し始めて御本尊御遷座の上移転せり」と記している。午後4時過ぎに起こった噴火による泥流が漸く収まり始めたのが6時間後の夜10時頃で、住職の留守に3人の子どもを抱えた夫人がなんとか命が助かったと思えたのが夜中の12時過ぎであったという、体験した者でしか話せない貴重な報告である。生きるか死ぬかの瀬戸際体験で、現代の災害時であれば「PTSD」になる可能性が高い。住職も胸まで泥中に浸かりながら暗闇の中を必死で進み、深夜2時に戻り着いた。その後、御本尊を現在の駅前に移し、ここを専誠寺仮事務所としたのであった。

専誠寺検分の後、山方面にある門徒避難所へ慰問に赴いている。まず、60 cmの泥中をズボンを脱いで渡り、「生きた心地なかりし程」の思いで1.3 kmを2時間かけて線路まで辿り着く。「線路を通行するも官吏但し鉄道係と救護隊と新聞記者、通信員、僧侶とのみ許可せられ、他は絶対に禁止せらる。許可を得て3里の山奥へ訪ね、正午過ぎ田村平太郎外4名の家族を訪問」した。線路上を進むのは危険であるが、それを許されたのは、公務員と鉄道係、救護隊、新聞記者、それに僧侶であった。当時としては災害時の僧侶の役割がある程度認識されていたものと考えられ、これも貴重な記録である。午後は反対方向に8 km行って9戸を慰問して、途中豪雨に遭いながら午後6時に専誠寺仮事務所に戻っている。「本日も死体6個上がる。未発見のもの70以上に及ぶ」と、その日に知り得た情報を記している。また、夜には門徒が惨状を訴えに来たことが記されている。

5. 実状視察及び慰問3日目及び4日目（大正15年5月31日及び6月1日）

5月31日は夜半より雨が上がり晴天となった。「31日朝5時より亦慰問と避難者個所を訪問す。山方面へ3里自転車をもて走れり。6戸あり。帰途死者3名の死体に遭う。途中役場を訪問す。村長不在。亦、途中馬の死体を焼けるを見るも焼けず半焼也。只乾きける泥は硫黄を含める故に、火はそれに付きて或は流木に焼け付けば大惨事の上の惨事となる故中止して、悉く埋むる事に決せる様子なり。当日は全部で22戸訪問して夜7時に帰る」と記している。噴火から1週間が経ち、徐々に泥土が乾いてきているのか、この日は自転

車に乗って、朝5時から夜7時までの間に22軒の慰問を行っている。

その間に、役場に立ち寄っているが、吉田村長は不在であった。小説「泥流地帯」の中で、吉田村長は不眠不休の活動を行っているが、実際の記録の中でも被災地を駆け回っている村長の姿がうかがえる。また、慰問途中に人や馬の死体に出遭っているが、その都度合掌して読経をしたものと推察する。

6月1日も朝6時から慰問に出かける。「市街地西川氏の宅を訪問せるに山下三重県属に遭ふ、亜麻会社々宅に避難せる田村勘を訪ふ。子供2人流失して死体未発見。内田住職と共に読経し菓子香を供ふ」と、途中で三重県職員に出遭ったことを記している。三重県職員も慰問活動を行っていたものと思われる。また、子ども2人の死体が1週間以上経っても発見されない門徒宅では、死体のないまま香と菓子を供えて読経している。

一方で、「午後4時帰れば田村岩藏の母の死体上りたりとの通知に接し、直に行き小経黙読して帰る。平素死体に対する挨拶は『御気の毒』なるも現状は然らず。死体を見れば『先づ結構でした』と喜ぶ也」と、今度は死体が1週間ぶりに発見された門徒宅では、「結構でした」と喜びながら読経したことが記されている。この頃になると死体が発見されることが喜びになるのである。

その後、「午後6時、寺族に別れを告げ、本部に於て村会議員に面会し、種々慰問と共に専誠寺の復興に関し依頼し、6時50分発にて帰札の途に就く」と、報告を終えている。上述のように、午後4時に仮事務所帰り、直ぐに死体が上がった門徒宅に向いているが、これは予定外の行動であったと思われる。本来は4時に慰問から帰り、6時までの間に札幌へ帰る準備を整えるつもりであったところ、死体発見の知らせに急遽門徒宅に赴いたのであろう。本来であればじっくりと読経するところ、時間のなかで、阿弥陀経（小経）を「黙読して」戻ったと推察される。そのまま6時に寺族に別れを告げ、救護所本部で関係者に依頼、挨拶をして、6時50分発の列車に飛び乗ったのである。

最後に「3. 罹災戸数及び死亡者人員を調査するに戸数（吾派門徒）76名」と題して、視察の結果を報告している。各門徒宅の死亡者人数と罹災家屋の戸数を具体的な氏名を挙げて記載している。そして、「本山より専誠寺及び寺族に対し見舞のため各金一封、罹災28戸に対しては御本尊並に金一封宛、其他へは金一封宛、死亡者に対しては御染筆法名並に念珠を授与されたり」と結んでいる。これは、本山に報告した後に、改めて授与された記録であると思われる。

6. 考察 一仏教福祉実践としての大正期の災害援助活動一

十勝岳噴火による大惨事の援助活動については、現在の高田派専修寺北海道別院には記録は残っていない。「本山報告」第305号に掲載された報告は、大正14年8月から札幌別院に佑事（輪番代理）として赴任していた千草壽磨（真宗高田派専修寺北海道別院、1993）が被災地を慰問した時の記録である。特に僧侶としての視点からの報告であり、仏教福祉

実践を考える資料として意味のある記録である。小説「泥流地帯」や中央防災会議の報告書の内容と重なる部分も多々認められるが、僧侶の視点と小説家の視点や防災の専門家の視点の違いも少なくない。

「本山報告」では報告者自身以外の僧侶が慰問等の活動をする場面として、「これらの中に交りて各宗僧侶及新聞記者、青年団等東奔西走し、郵便配達は電信書面等を山の如くに負ひて」「線路を通行するも官吏但し鉄道係と救護隊と新聞記者、通信員、僧侶とのみ許可せられ」と記録している。しかし、小説「泥流地帯」では、「何しろ、旭川、上川、空知の各地から、青年団員、消防団員、線路工手、保線係、赤十字社救護班、旭川医師会救護隊、旭川市役所吏員、警察官、新聞記者、その他一般の見舞人、視察の役人等々、一日に何百人もの人間が、この小さな上富良野村に押しかけた」と記述しているが、僧侶の姿は捉えられていない。また、中央防災会議の報告書(2007)では、上富良野における奉仕作業を行った者として、青年団、在郷軍人分会、消防組、救護隊、愛国婦人会、他支庁管内の団体、天理教上川団を挙げている。天理教は記録されているが、仏教僧侶の活動の記録はない。

また、「本山報告」では、災害翌日に職員を派遣する時に「葉書 1,000 枚」、5日後の視察、慰問に赴く時に「葉書 2,000 枚」を持参している。しかし、小説「泥流地帯」には、葉書に関する記述はない。「今度の災害には、塩マス五十貫とか、味噌を二十樽とか、衣類を何十包とか、反物二百反とか送られてきたことは聞いていた。義捐金も、百円以上の巨額を、たくさんの団体や個人が送ってきたことを聞いていた。だが、教科書や文房具を贈って来たのはその救世軍だけであった」と、キリスト教の救世軍が文房具を贈って来たことが書かれている。確かに、子どものために文房具を贈るということは、当時の災害時には気づきにくいことであり、貴重な援助行為であったと思われる。同様に、葉書贈呈も有意義な活動であった。葉書は遠方の親類、知人に災害に関しての安否を伝える、当時としては唯一の手段であったと考えられる。このような僧侶の援助活動は、心のケアにも関連するものとして重要な視点である。また、中央防災会議(2007)の報告書には電信電話の復旧や混乱に関する項目はあるが、葉書の記述は見当たらない。

札幌別院からの出張の目的は、本山から指示のあった実状視察と慰問であった。慰問の内容は罹災者宅を見舞い、慰めることである。特に、家族に死者が出た門徒宅では単に言葉しかけるだけでなく、蠟燭、線香、落雁を供えて、読経をしている。読経は死者に向けてというよりも、残された遺族の為の慰めである。これも心のケアの重要な実践である。多くの死者が出た被災地では僧侶は慰問のために積極的に活動していたと思われる。それ故に、「各宗僧侶及新聞記者、青年団等東奔西走し」ていたのである。しかし、中央防災会議(2007)の報告書には、避難所となった上富良野村の明憲寺に約 1,000 人が集まり、「言語に絶する」様子が「北海タイムス」(大正 15 年 5 月 27 日付)の記事から紹介されているが、僧侶の活動に関する記述はない。また、小説「泥流地帯」中で関連する唯一の場面として次の記述がある。「あごひげの老人が進み出て、お経を読み始めた。縞のモンペに黒い羽織

を着て、老人は単調な節でお経を読む。百人以上もの死者が一度に出たのでは、僧侶をこの遠い所まで呼ぶわけにはいかない。お経はそれでも、十分ほど読まれて、焼香がはじまった」と、主人公の耕作は家族の葬式に僧侶を呼ぶことができなかったという話になっている。しかし、実際には僧侶は東奔西走し、命がけで泥海の仮橋を渡り、ズボンを脱いで泥中を進み、許可を得て線路上を歩いて、多くの死者と遺族に読経の慰問をして回っていたのである。

この死者と遺族に対する読経は真宗の実践において如何なる意味があるのか。親鸞聖人が42歳の時に佐貫という所で三部経の千回読誦を行い、念仏の他に何が必要かと思ひ返し、途中で止めたという話が妻である恵心尼の手紙の中に残っている。これは親鸞聖人が矛盾を感じながらも、災害で苦しむ人々の心の安寧を願って行われたものと思われる。これは自力の行為であって、他力ではないという客観的な思考ではない。その地域の人々の姿を見て、千回読誦をせずにはおれないものがあつたと思われる。この点を亀山(2012)は、「専修念仏は、単に後生善処でなく現世安穩の願望に応答するものとして、災害苦からの救済、一般に現世を生き抜く希望の原理として、それが弥陀の本願の真意であることが、あらためて明確にされた。おそらく、それは佐貫での三部経中断の経験以来、災害苦の救済活動のたびに經典読誦への傾斜の繰り返しの中で、次第に明らかになってきたことであつたと思われる」と論じている。頭の中で考える念仏ではなく、災害苦の中に喘ぐ現実の人々の姿から生じる念仏と捉えても良いと考える。災害で家族を失った人々に寄り添い、静かに読経することは被災者への心のケアとなる。

災害時における物質的な援助も重要であるが、それに加えて犠牲者宅を訪れて僧侶でなければできない読経という慰問を命がけで実践した大正期の記録は、今後の仏教福祉を考える上で大いに参考になるものとする。

付 記

前稿に引き続き、玉保院蔵の「本山報告」の電子データを用いた。閲覧を許可頂いた玉保院住職水沼秀明師に感謝申し上げます。また、昨年3月に千草壽磨の次女である竹内令により、筆者が全文を新漢字、新仮名遣いに書き換えたものを「十勝岳爆発－山津波五日後の現地－」と題して私家版を発行し、関係者に配布したので付記する。

文 献

- ・千草篤磨 2017 三重県における社会福祉事業の歴史(2)－大正期の高田派の社会事業について－ 高田短期大学介護・福祉研究 第3号 1-10
- ・千草篤磨 2018 三重県における社会福祉事業の歴史(3)－昭和初期から終戦までの高田派の社会事業について－ 高田短期大学介護・福祉研究 第4号 1-12
- ・千草壽磨 1926 北海道における惨事 本山報告 第305号 13-18

- ・ 亀井純生 2012 災害社会・東国農民と親鸞浄土教 農林統計出版
- ・ 三浦綾子 1977 泥流地帯 新潮社
- ・ 三浦綾子 1979 続・泥流地帯 新潮社
- ・ 内閣府中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2007 1926 十勝岳噴火報告書
- ・ 真宗高田派専修寺北海道別院 1993 百年史
- ・ 竹内令 2018 十勝岳爆発－山津波五日後の現地－ 私家版
- ・ 読売新聞（三重版） 2018年6月20日付

参考資料

「本山報告」第305号（1926）より

北海道における惨事

一 硫黄山爆発し泥海を現出 吾派の専誠寺はじめ門徒多数罹災一

十勝嶽の一部にして、上川郡美瑛村を距たる約二里半の地点なる硫黄山は、五月二十四日午後四時頃突然大鳴動と共に、湖水を支へてゐた岩石欽潰して流失し、山上よりは熱湯噴出して山麓に流下し、ために上富良野周囲約三里四方の間は全く泥海と化し惨憺たる光景は目もあてられなかつた模様であるが、空知郡上富良野なる吾が派の専誠寺はじめ門徒多数罹災し、本山よりは夫々慰問救援の途を講じた。惨事の詳細は左の報告に俟つこととする。

一 札幌別院より

廿五日午前十時北海タイムスの號外により直に打電大惨害の事上申候處、午後五時卅五分懇篤なる御慰問の電命に接し同日午後十時内田弘を同人家族安否知る爲を兼ねて右の趣傳達の爲不取敢急行せしめ村長吉田貞次郎（門徒）及び専誠寺へ派遣仕候、其節別院職員一同より葉書千枚贈呈せる處後にて聞けば廿六日朝贈呈と同時に十分間にして罹災者の爲に使用し盡されし由に御座候、廿五日午後六時直に御慰問電の趣並に罹災者焦眉の急を救ふべく義捐金を募集候處、直に參拾餘圓集め之亦直に送金仕候、刻々と發行せらるゝ號外により概要を知り電信にて上申御援助を仰ぎ候處罹災者戸数を知らせよとのこと故八十戸と御通知仕候、實情視察と慰問（被害の八分は吾が派關係なり）の爲め葉書二千枚及筆墨、副食物二樽持參及び落雁三千枚、蠟燭、線香等用意し寺男二人連れて出張し全部を慰問仕り本日午後六時歸院仕候。（六月三日）

二 上富良野大惨害實情視察概要

五月廿九日救護隊、應援青年團、軍隊、見舞客等の爲め殆ど壽志詰の如き列車に旭川よりは立ちづめにて午後二時前美瑛驛通過。上富良野驛の手前一哩程の處より明かに大惨事の實況展開せらる。此邊より鐵道線路は一日二千余人の工夫の手により晝夜兼行四日間にて三尺以上の泥海の眞直中を土俵により道を造り新らしく鐵路を敷きて完成せるものなれば汽車のガタガタと揺れる事限りなし。工費十五萬圓と聞く。硫黄山より噴出せる溶土と積雪をとかしたる水とは山岳の断崖を破壊し約三十萬石の立木とを倒し、其大木を先頭として濁流にはあらで全くの泥流を以て五里の間山谷をうねりうねりて約三十分間程にて此個所に來たり恰も袋の口の如き所より溢れ出

三重県における社会福祉事業の歴史（4）

たる奔流は一時に村落を襲ひ先頭の立木と二丈の泥流とによりて一溜りもなく沃野を埋め家を流し人畜を奪ひたる由。朝來の大豪雨に窓外被害地泥土の上を濁流沼々として逆巻き一望只濁れる大泥海、恰も盪の中にマッチの軸木をバラ蒔きたるに似たと流失倒壊せる家屋の殘骸点々たると豪雨の中泥海の中に腹部まで這入りて交通の爲流木を利用して縦横に架設する假橋の工事のために従事する救援隊の人影と何々青年團或は何々應援隊と記せる旗影とのみ。

暫時にして上富良野驛に着これ市街地にあり構内人の山にして乗降客毎日七八千人なりとの由。漸くにして構内を出でて見れば驛前に救護所本部あり上川支廳出張所、警察、軍隊、救援隊、役場出張所、道廳出張所、避難民受付及案内、通信機關出張所、三重縣出張所、慰問品受付其他十枚程の貼紙を以て事務所の表示をなしテント張りの休憩所、有志の茶接待所、炊出しの本部等何百人の係員右往左往し其間に避難者を訪ぬる人、申込む人、ありこれらの中に交りて各宗僧侶及新聞記者、青年團等東奔西走し郵便配達は電信書面等を山の如くに負ひて一々避難者の所を探しつゝある様實に戦場も斯くやと思はれ俄かに緊張味を感じず。

訪ねんとする専誠寺への道はなく寺族は何處に在るや不明なれば避難者受付係を訪へど人多くして如何ともする不能困難せるもフト伊藤某なる者驛前の料理店主にして本年二月別院へ參詣の節名刺置き行きけるを思ひ出し尋ねしむ、直に丸竹屋號なる由判明す、同行三名これを訪ぬ。軒前に同家主婦赤きりボンを胸に付け十名ばかりの家族雇人と共に茶の接待をなし居たるに刺を通じたるに直に案内さる。専誠寺は此家の裏合せなる元料理店たりし大家屋なり、これに廿八日午前移りたる由。這入れば寺族暗然として一室に集り無言のまゝ端座せるのみ。形ばかりの床の間に御本尊を安置し兩側に九字十字御名號を懸け三具足を供へてあり。御本尊の前に跪座して感慨無量なり。

直に準備し來れる蠟燭、線香、落雁を供へ且つ懷中に持參し來れる「十勝ヶ嶽硫黄山爆發罹災死亡者靈位」と記せる位牌を尊前へ安置し、従ひ來れる門徒及び下男二人と共に小經正信偈一首讀を勤行す、住職内田は心及び別院雜仕心得として勤務せる内田弘は門徒死亡者の處へ行きて不在、只坊守と子供三人のみ、慰問の辭を述べて段々災害の模様を聞けば奇蹟的に生命の助かりたる事判明せり、而かも同寺に於ては猫、鶏の類まで助かりたる事愈々不思議なりと噂せり。午後五時頃住職歸り來る弘亦歸る。共に涙の中に無事を祝す。

別院門徒有志より贈る處の義捐金を以て購入せる葉書二千枚及び落雁、筆墨、副食物等を呈し全寺門徒總代村長吉田貞次郎と相談の結果可然處分せられ度く傳へて直に市街地在住の門徒を慰問のため訪問する事に決し洋装の上に輪袈裟を着用し住職の案内にて下男二人を連れて七時までに廿戸斗りを慰問せり。専誠寺に漸くにして一泊、僅に雨露を凌ぐのみ。

翌三十日晴れたり朝五時住職並に下男他二名と共に専誠寺被害の視察をなす。市街地はづれより約十八丁を隔てたる同寺の前まで、必死の努力によりて架けられたる假橋に、廻り七八尺もある無数の流木の横はりたるを臺としてそれに旭川、池田方面より急送したる板を架けたるものにして漸く人一人通行し得る程度なり而かも一尺乃至五寸下は濁流滔々として奔流し落つれば泥土の深さ平均三四尺と稱する故に到底普通の者は助かるを得不得目はまひ見渡す限り一大泥海十八丁

の間は眞に命がけなり。一步一步念佛と共に渡り一時間もかゝりて専誠寺の前に達すこれより學校方面へ約六百人程の救援團は胸まで泥中に浸して架橋しつゝあり、元流れつゝありし河は埋まり新に他に三川を作りたり。専誠寺の近傍に流れたる家の殘骸廿五六戸僅かに屋根の上のみを見せて泥中にあり、これらは皆歟潰せる線路の狭き間より奔流せる泥の流れの眞正面に當りたるものばかりにして専誠寺の裏は其中心なり、然るに本堂庫裡平然と殘れり實に奇蹟的なり、流木を飛び越え約四十間ばかり生命がけにて寺内に這入る、仔細に檢分すれば此寺院の殘れるは奔流の中心点に當りたる爲上より流れ來たる流木が先づ寺の廓外の立木にかゝりその流木の積まれたるのみにても約三丈の高さに達す、それに流失の家屋もかゝり自然と防波壁を作り、これによりて奔流は兩方に分流せられて勢力を失ひたる故に寺院のみ流失を免れたるものなり、本堂へ入れば慘憺たる情況にして泥土一様にして家具建具は亂雑を極め床上三尺の泥あり内陣は亦それより多く四尺に達せり、御厨司其他は無事なり、庫裡は殆ど見る影もなし、家財道具はまだそのまゝにしてこれを運ぶは泥土の干きたる後ならでは出來ず。寺族は當日住職は市街に行きて不在午後四時半頃大鳴動ありし後瞬時にして二三丈の泥流押し寄せ來り本堂内に大流木飛び込み來たり如何ともする不能、庫裡は見る見るうちに四尺以上の泥床上に上り段々追い詰められて本堂裏の最後の一室に逃ぐ子供三名を坊守は背に兩側に抱き死を決してありしに泥は三尺に達する時愈々最後なりと觀念せる折俄かに座敷の疊そのまゝに浮き上がりて埋まるを免る、夜の十時過に段々下りて落付きたりて漸く十二時過に一命を助かりたるを知りしと、これ床下に入りたる泥なるが故に床板共に押し上げたる爲なり、住職は萬難を排して午前二時頃各地を迂廻して胸までの泥中を押し切り漸く歸寺し始めて御本尊御遷座の上移轉せり。

これを見て、門徒の避難所（山の方面）を訪問すべくズボン脱ぎて再び假橋の中途まで戻り左折して流木の上を飛び越え約十二丁斗りを二時間を費して漸く新線路上に上る途中泥中二尺の處を渡りて生きてきたる心地なかりし程なり。線路を通行するも官吏但し鐵道係と救護隊と新聞記者通信員僧侶とのみ許可せられ他は絶対に禁止せらる許可を得て三里の山奥へ訪ね正午過ぎ田村平太郎外四名の家族を訪問す、母を慘死せしめて悲嘆の涙に暮る、午後頃反對の方向を二里行きこゝにても九戸を訪ね六時過ぎ一先づ専誠寺假事務所へ歸る、途中豪雨に遭ひ困難を極む本日も死体六個上る未發見のもの七十以上に及ぶ、爲に死体搜索隊懸命に尋ぬるも何分三四尺の泥海にして而かも三里に五里の面積を探る故に困難は筆紙に盡し難し、全夜門徒の者七八名來り慘状を訴ふ今回の慘害者三重團體の大部分にしてそれは殆ど専誠寺の門徒なり。全夜も亦一泊す、夜半より晴れたり翌三十一日朝五時より亦慰問と避難者個所を訪問す山方面へ三里自轉車を以て走れり、六戸あり、歸途死者三名の死体に遭う、途中役場を訪問す村長不在、亦途中馬の死体を焼けるを見るも焼けず半焼也、只乾ける泥は硫黄を含める故に火はそれに付きて或は流木に焼け付けば大慘事の上の慘事となる故中止して悉く埋むる事に決せる様子なり、當日は全部で廿二戸訪問して夜七時に歸る。六月一日六時亦慰問に出かけたり、市街地西川氏の宅を訪問せるに山下三重縣屬に遭ふ、亞麻會社々宅に避難せる田村勸を訪ふ子供二人流失して死体未發見、内田住職と共に讀經し菓子香を供ふ、篠原久吉を尋ぬるも不得、三名死亡し久吉は亦奇蹟的に助かりたり即ち流木

三重県における社会福祉事業の歴史 (4)

に衝き當りてそれに乗せられ自作の讚佛數へ歌を高唱し乍ら大慘害を見物して線路を越ゆる時に倒れたるも亦木に乗せられ腰打かけ乍ら押し流され高地に木の衝き當ると全時に安全場所へ投げ出されて無事なるを得たる等悲喜劇なり。但し孫と小供と自分とのみ残れるは矢張り悲慘なり、午後四時歸れば田村岩藏の母の死体上りたりとの通知に接し直に行き小經黙讀して歸る。平素死体に對する挨拶は「御氣の毒」なるも現状は然らず死体を見れば「先づ結構でした」と喜ぶ也、午後六時寺族に別れを告げ、本部に於て村會議員に面會し、種々慰問と共に專誠寺の復興に關し依頼し、六時五十分發にて歸札の途に就く。(千草壽磨)

三 罹災戸數及び死亡者人員を調査するに戸數 (吾派門徒) 七十六名

死亡者

| | | | | | | | |
|-------|-----|--------|----|-------|-----|-------|------|
| 吉田貞次郎 | 母一名 | 田中 常七 | 二名 | 高田 信一 | 三名 | 若林伸次郎 | 五名 |
| 田村 岩藏 | 母一名 | 分部 牛松 | 六名 | 田村平太郎 | 母一名 | 田村 勘 | 二名 |
| 田中勝次郎 | 一名 | 若林助右衛門 | 七名 | 篠原 久吉 | 三名 | 合計 | 三十二名 |

罹災家屋の内被害尤も甚だしきものは右の内吉田村長の家屋を除く十戸の外左の十八戸なり。

| | | | | |
|-------|-------|-------|--------|--------|
| 分部 倉三 | 山崎 林松 | 高山熊次郎 | 臼井新次郎 | 川喜田幾久一 |
| 萩原常三郎 | 米川 喜助 | 山崎 兵松 | 高士仁左衛門 | 落合 善助 |
| 伊藤惣兵衛 | 伊藤藤太郎 | 米村 幸吉 | 高田 利三 | 立松爲二郎 |
| 内田 庄治 | 内田 幸吉 | 山崎又次郎 | 總計 | 二十八戸 |

本山より專誠寺及び寺族に對し見舞のため各金一封、罹災二十八戸に對しては御本尊並に金一封宛其他へは金一封宛、死亡者に對しては御染筆法名並に念珠を授與されたり。